

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-208430

(43) 公開日 平成9年(1997)8月12日

(51) Int.Cl. ⁶	識別記号	序内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 1 K	7/027		A 6 1 K	7/027
	7/025			7/025

審査請求 未請求 請求項の数2 F D (全 7 頁)

(21) 出願番号	特願平8-38792	(71) 出願人	000001959 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号
(22) 出願日	平成8年(1996)1月31日	(72) 発明者	石川 浩 神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株 式会社資生堂第一リサーチセンター内
		(74) 代理人	弁理士 岩橋 祐司

(54) 【発明の名称】 口唇用組成物

(57) 【要約】

【課題】 艶、着き、伸びに優れしかも基剤臭の低いグロスタイプの口唇用組成物を提供することを目的とする。

【解決手段】 10～60重量%の液状ラノリンと、10～50重量%のポリイソブテンを配合し、かつ液状ラノリンとポリイソブテンの合計が70重量%であることを特徴とする口唇用組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】10～60重量%の液状ラノリンと、10～50重量%のポリイソブテンとを配合し、かつ、液状ラノリンとポリイソブテンの合計が70重量%未満であることを特徴とする口唇用組成物。

【請求項2】請求項1に記載の口唇用組成物において、ポリイソブテンの平均分子量が800～1200であることを特徴とする口唇用組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は口唇用組成物に関し、特に艶、着き、伸び等の使用性に優れ、基剤臭の改善された口唇用組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】口唇用組成物にはスティック状、練紅状、クリーム状、液状等のものがあり、配合される色材量、基剤等により形状とは関係なく、口紅、ルージュ、リップクリーム、グロス等と呼ばれる。使用方法についてもそれぞれの組成物を単独で使用するほか、いずれかの組成物を下地として塗布し、その後、他の組成物を塗布する場合がある。特に、艶に特徴を有する組成物は最後に塗布するのが一般的である。

【0003】最近の口唇用組成物に対する市場の要求は、艶のないマットタイプと呼ばれるものから、艶がより求められるグロスタイプと呼ばれるものまで大きく広がってきている。さらに近年では、グロスと呼ばれる練り紅状の組成物が提供されるが、グロスはグロスタイプの口紅よりより艶が高く、着色剤を全く含まないか、含んでも極微量であり、又はパール剤のみを含み光沢を出すものである。これらの口唇用組成物のうち、マットタイプと呼ばれるものは主として粒径の大きな粉末を配合することでその使用感、仕上がりの満足できる製品を得ることができる。

【0004】一方、グロスタイプの口紅及びグロスの艶は、従来種々の油分の配合により演出してきた。例えば、艶を増す成分として最も一般的には液状のヒマシ油が用いられている。ヒマシ油は高粘度の油分であり、配合量を増やすことにより艶を演出することが可能である。しかしながら、艶を出すために多量のヒマシ油を配合すると、油分特有のべたつきが顕在化したり、適当な硬度を保持することができず、その結果多量の固形油分を配合する必要が生じ、液状油分と固形油分の比率が変わり、伸び、着き等の使用性に影響を与える。また、ヒマシ油には特有の匂いがあり、これをカバーするために多量の香料を配合する必要があった。

【0005】また、ヒマシ油に代えてヒマシ油よりも低粘度である液状ラノリンを配合することもある。液状ラノリンはヒマシ油と比較して匂いが少ない点では優れているが、十分な艶を得るためには多量の配合を要し、この結果べたつきが生じてしまい、使用感が悪い。さら

に、ポリイソブテンはヒマシ油よりも粘度が高く少量で艶がでるが、粘度が高いがために塗布時の伸びが悪くなるという欠点を有している。

【0006】

【発明の解決しようとする課題】したがって、これらの油分を単純に配合しただけではグロスタイプの口紅グロスの艶を十分に引き出すことはできなかった。本発明は前記従来技術の課題に鑑みなされたものであり、その目的は、艶、着き、伸び、共に優れ、しかも基剤臭の低いグロスタイプの口唇用組成物を提供することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】前記目的を達成するために本発明者らが鋭意検討を重ねた結果、従来艶を演出する油分として用いられていた液状ラノリンと、ポリイソブテンを組み合わせることで配合することによりきわめて高い艶を有し、着き、伸び等の使用性に優れ、しかも基剤臭の低い口唇用組成物が得られることを見出し、本発明を完成するに至った。

【0008】すなわち、本発明の請求項1に記載の口唇用組成物は、10～60重量%の液状ラノリンと、10～50重量%のポリイソブテンを配合し、かつ液状ラノリンとポリイソブテンの合計が70重量%であることを特徴とする。また、請求項2に記載の口唇用組成物は、請求項1に記載の口唇用組成物において、ポリイソブテンの分子量が800～1200であることを特徴とする。

【0009】

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施の形態を説明する。本発明におけるポリイソブテンは、平均分子量が800～1200のものが好ましく、特に800～1000のものが好ましい。これより分子量が低いものでは高粘度油分にならず、艶を増すことができない。平均分子量がこれより高くなると使用性の点で重く、伸びの悪いものとなり満足できる使用性を得ることはできない。しかるに上記のポリイソブテンを用いると、艶を増しながら、良好な使用性を示す口唇用組成物が得られる。

【0010】本発明のポリイソブテンの含有量は10～50重量%の範囲で含有させることができ、通常20～40重量%の範囲で含有させるのが好ましい。10重量%未満では、液状ラノリンのべたつきを押さえることはできず、一方、50重量%を越える量配合すると、ポリイソブテンの伸びの悪さが顕在化してしまい、好ましくない。

【0011】また、本発明における液状ラノリンはほぼ2500cps以下のものが使用される。通常のラノリン（ペースト状半固体）では使用性が重くなってしまっ

0重量%の範囲で含有させるのが好ましい。10重量%未満では、ポリイソブテンの伸びの悪さを改善することができず、一方、60重量%を超える量配合すると、液状ラノリンのべたつき等が顕在化してしまい、好ましくない。

【0012】本発明の口唇用組成物の製造は当該口唇用組成物中に上記必須成分をそれぞれの好適な配合量で含有させる以外は常法にしたがい行われる。すなわち、例えば、スティック状の口唇用組成物を例にとると、上記量の液状ラノリン、ポリイソブテンと油脂類、ワックス、ロウ等の油性基剤を加熱溶融し、これに必要に応じた色素、香料、薬効成分等の任意成分を加え均一となるまで混合し、容器に充填して冷却固化させることにより製造される。

【0013】本発明の口唇用組成物には、上記必須成分の他各種油性基剤を配合することが可能である。具体的に使用される油性基剤としては、カルナバロウ、キャンデリラロウ、ライスロウ、モクロウ、ミツロウ、セレンワックス、マイクロクリスタリンワックス、パラフィンワックス、硬化牛脂、硬化ヒマシ油、硬化ホホバ油、半固形～固型ラノリン、ワセリン等の固体ないし固形油性基剤、流動パラフィン、スクワラン、オリーブ油、ヒマシ油、ホホバ油、マカデミアナッツ油、シリコーン油、合成エステル油等の液状油性基剤が挙げられる。また、その他の任意成分としては何ら制約されるものではなく、その典型的なものとしては、無機顔料、有機顔料、パール剤、染料、酸化防止剤、消炎剤、ビタミン類等の

薬効成分、防腐剤、紫外線防止剤、紫外線遮蔽剤等が挙げられる。

【0014】本発明の口唇用組成物は、固形のスティック状、半固形の練紅状として用いることが可能である。また、本発明の口唇用組成物は、着色顔料を配合した口紅として直接口唇に塗布される他、口紅を塗布した上にさらにオーバーコートとして塗布することも可能である。このようにオーバーコートとして塗布した場合、例えば本来艶を持たないマットタイプの口紅等を塗布した口唇にも艶を与えることが可能である。

【0015】

【実施例】以下、本発明の具体例を挙げて本発明をさらに詳細に説明する。なお、本発明はこれに限定されるものではない。また、配合量は特に示さない限り重量%で示す。まず、本発明者らは、十分な艶を得、しかも使用性に優れた口紅を得るべく、従来より用いられる液状ラノリン、ヒマシ油、ポリイソブテンの配合及び組合せについて検討を行った。なお各口紅の評価は専門パネラー10名による実使用テストにより官能評価を行った。評価結果を下記の記号により示した。

◎：8～10名が良好と判定した

○：6～7名が良好と判定した

△：4～5名が良好と判定した

×：0～3名が良好と判定した

【0016】

【表1】

	試 験 例					
	1	2	3	4	5	6
ポリエチレンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
セレンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
カルナバロウ	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
グリセリン2脂肪酸エステル	36.0	36.0	36.0	36.0	36.0	36.0
液状ラノリン	40.0	—	—	20.0	—	20.0
ヒマシ油	—	40.0	—	20.0	20.0	—
ポリイソブテン	—	—	40.0	—	20.0	20.0
顔料	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
香料	適量	適量	適量	適量	適量	適量
艶	○	○	○	○	○	○
着き	△	○	○	○	○	○
伸び	○	○	△	○	○	○
基剤臭	○	△	○	△	△	○

なお、ポリイソブテンは分子量1000のものをを用いている。

【0017】表1の結果より明らかなように、口紅に艶を与える油分として代表的な液状ラノリン、ヒマシ油、ポリイソブテンを単独で配合した場合には、各油分の欠点が発現化してしまう。そこで、これらの油分を組み合

わせて用いることを検討したところ、ヒマシ油と、液状ラノリン、若しくはポリイソブテンを組み合わせで配合した場合には、使用性の点は改善されるものの、ヒマシ油独特の匂いは改善されない。一方、液状ラノリンとポリイソブテンを組み合わせで配合した場合には、使用性の改善がなされ、しかも基剤臭の少ない口紅を得ること

ができた。次に、本発明者らは液状ラノリンの配合量について検討を行った。

【0018】

【表2】

試 験 例

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ポリエチレンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
セリンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
カルナバロウ	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
グリセリル2エチルヘキサエート	60.0	55.0	50.0	45.0	35.0	25.0	15.0	10.0	5.0	0.0
液状ラノリン	5.0	10.0	15.0	20.0	30.0	40.0	50.0	55.0	60.0	65.0
ポリイソブテン	13.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0
顔料	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
香料	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量
艶	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
着き	○	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	△
伸び	△	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○
基剤臭	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

なお、ポリイソブテンは分子量1000のものをを用いている。

【0019】表2より明らかなように、液状ラノリンが10重量%未満ではポリイソブテンの影響で伸びが悪くなってしまい満足できる使用感が得られない。また、液状ラノリンを60重量%を越える量配合すると、液状ラノリンの影響で、着きが悪く、べたつきを生じてしま

う。したがって、液状ラノリンの配合量は10～60重量%、特に20～50重量%配合することが好適である。

【0020】さらに、ポリイソブテンの配合量について検討を行った。

【表3】

試 験 例

	17	18	19	20	21	22	23	24	25
ポリエチレンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
セリンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
カルナバロウ	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
グリセリル2エチルヘキサエート	51.0	46.0	41.0	36.0	31.0	26.0	21.0	16.0	11.0
液状ラノリン	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0
ポリイソブテン	5.0	10.0	15.0	20.0	30.0	40.0	45.0	50.0	55.0
顔料	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
香料	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量
艶	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
着き	△	○	○	◎	◎	◎	○	○	○
伸び	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	△
基剤臭	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

なお、ポリイソブテンは分子量1000のものをを用いている。

【0021】表3の結果より明らかなように、ポリイソブテンの配合量が10重量%未満であると、液状ラノリンの影響が大きく着きが悪く、べたつきを生じてしまう。また、ポリイソブテンの配合量が50重量%を越えると、ポリイソブテンの伸びの悪さが顕在化してしま

う。したがって、ポリイソブテンの配合量が10～50重量%、特に20～40重量%であることが好ましい。次に、液状ラノリンとポリイソブテンの合計配合量について検討を行った。

【0022】

【表4】

試 験 例

	26	27	28	29	30	31	32	33	34
ポリエチレンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
セレンシンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	65.0	55.0	45.0	35.0	25.0	20.0	15.0	10.0	5.0
液状ラノリン	10.0	15.0	20.0	25.0	30.0	32.5	35.0	37.5	40.0
ポリイソブテン	10.0	15.0	20.0	25.0	30.0	32.5	35.0	37.5	40.0
顔料	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
香料	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量

液状ラノリン+ポリイソブテン	20.0	30.0	40.0	50.0	60.0	65.0	70.0	75.0	80.0
----------------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

艶	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
着き	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	○
伸び	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	△
基剤臭	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

【0023】上記結果より明らかなように、液状ラノリン、及びポリイソブテンが各好適な配合量の範囲にあっても、合計量が70重量%を越えると、液状油分と固形油分の比率が変化し、着き、伸び等の使用性が低下する場合がある。したがって、液状ラノリンとポリイソブテ

ンの合計配合量が70重量%以下であることが好適である。次に、本発明者らはポリイソブテンの分子量について検討を行った。

【0024】

【表5】

	試 験 例				
	35	36	37	38	39
ポリエチレンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
セレンシンワックス	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
カルナバロウ	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	16.0	16.0	16.0	16.0	16.0
液状ラノリン	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0
ポリイソブテン	30.0	30.0	30.0	30.0	30.0
顔料	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
香料	適量	適量	適量	適量	適量
分子量	750	800	1000	1200	1250
艶	◎	◎	◎	◎	◎
着き	△	◎	◎	◎	○
伸び	○	◎	◎	○	△
基剤臭	◎	◎	◎	◎	◎

【0025】上記結果より明らかなように、分子量が800未満では十分な艶を得ることができない。一方、分子量が1200以上となると、ポリイソブテンの粘度が高くなり、伸びが悪くなってしまう。したがって、ポリイソブテンの分子量が800～1200、特に800～

1000であることが好ましい。

【0026】以下、本発明のより具体的な配合例を示す。なお、本発明はこれらの配合に限定されるものではない。また、配合量は特に示さない限り重量%で示す。

【0027】

配合例1 スティック状口紅

ポリエチレンワックス	5.0重量%
セレンシンワックス	5.0
カルナバロウ	10.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	20.3
液状ラノリン	30.0

ポリイソブテン (分子量1000)	20.0
赤色酸化鉄	1.0
黄色酸化鉄	1.0
赤色202号	0.2
赤色204号	5.5
香料	適量

合計：100.0重量%

【0028】

配合例2 スティック状口紅

ポリエチレンワックス	5.0重量%
セレンワックス	5.0
カルナバロウ	10.0
マカデミアナッツ油	7.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	15.3
液状ラノリン	25.0
ポリイソブテン (分子量1200)	25.0
赤色酸化鉄	1.0
黄色酸化鉄	1.0
赤色202号	0.2
赤色204号	5.5
香料	適量

合計：100.0重量%

【0029】

配合例3 練紅状口紅

ポリエチレンワックス	5.0重量%
セレンワックス	5.0
カルナバロウ	2.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	22.6
液状ラノリン	20.0
ポリイソブテン (分子量1000)	40.0
白色パール剤	3.0
黄色パール剤	2.0
赤色202号	0.1
赤色204号	0.3
香料	適量

合計：100.0重量%

【0030】

配合例4 練紅状口紅

ポリエチレンワックス	5.0重量%
セレンワックス	5.0
カルナバロウ	2.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	8.0
パルミチン酸2-エチルヘキシル	5.0
液状ラノリン	20.0
ポリイソブテン (分子量800)	45.0
白色パール剤	5.0
黄色パール剤	5.0

【0031】

合計：100.0重量%

配合例5 練紅状口紅

ポリエチレンワックス	5.0重量%
セレシンワックス	5.0
カルナバロウ	3.0
ホホバ油	7.0
グリセロールトリ2エチルヘキサノエート	15.0
液状ラノリン	20.0
ポリイソブテン（分子量1000）	45.0
香料	適量

合計：100.0重量%

【0032】

【発明の効果】以上説明したように、本発明の口唇用組成物によれば、塗布後の艶に優れ、しかも、着き、伸び

がよく、基剤臭も感じさせないという、優れた口唇用組成物を得ることが可能である。